白山人類学　11号　2008年3月

「移民」か「イギリス国民」か
——アレクサンダー・D・グレートのカリプソから読み解く「ウエスト・インディアン」の歴史

木　村　葉　子*

'Immigrants' or 'British Citizens':
A History of the West Indians in Lyrics of Calypso Written by Alexander D Great

KIMURA Yoko*

This paper explores the ethnic minorities in Britain, focusing on West Indians living in Britain. The year of 1948 was symbolically an important year when the ship, SS Empire Windrush, brought the first of the biggest wave of immigration from the West Indies, or the first coloured immigrants, which changed the cultural landscape in Britain.

In this paper, through the lyrics of calypso, I will examine the history of the West Indians adapting to British society. Calypso, which originates in West Africa, is a Trinidadian popular music developed with carnivals. Because the essence of calypso is of social criticism and satire, analyzing calypso is a good way of understanding a society.

With the lyrics of three calypsos written by Alexander D Great, a British calypsonian, the significant events that happened to the West Indians in Britain, such as the arrival of SS Empire Windrush, New Cross Massacre and Steven Lawrence Murder, are investigated. The main theme in these lyrics – whether the West Indians were 'Immigrants' or 'British Citizens' – is discussed.

キーワード：カリプソ，「ウエスト・インディアン」，トリニダード・トバゴ，エスニック・マイノリティ，エンパイア・ウインドラッシュ号

Keywords: Calypso, West Indian, Trinidad and Tobago, Ethnic Minority,　Empire Windrush

はじめに

1948年6月22日。ロンドン東部のティルベリー港にジャマイカからの移民など492人を乗

* 名古屋大学大学院文学研究科；Graduate School of Letters, Nagoya University, Furo-cho, Chikusa-ku, Nagoya, 464-8601/ yokokimura@dream.com

せた SS エンパイア・ウインドラッシュ号が入港した。それはイギリスが「有色市民を交えた多民族国家」へと変貌していく分岐点となっていく画期的な「事件」［フライヤー 2007: 215］であった。ジャマイカなど，カリブ海にうかぶ西インド諸島（West Indies）の出身者は，ウエスト・インディアン（West Indians）とよばれる。インドから遠く離れたところにありながら，コロンブスがこの地域を「インディアス」と命名したことから，このように呼ばれるようになった。この地域は，民族構成に差異があるものの，住民の大多数がアフリカ系の黒人である。彼らの祖先は，大西洋奴隷貿易によって，西インド諸島の労働力として売られたアフリカ人であった。

西インド諸島からイギリスへの移民は，ウインドラッシュ号をかわきりに，1950 年代から 1960 年代にかけて本格化した。本稿では，人種に関係なく，西インド諸島出身でイギリスに定住した人たちとイギリス生まれの第二世代，第三世代をふくめて「ウエスト・インディアン」と定義する。「ウエスト・インディアン」の大半を占めるアフリカ系は，イギリスの統計用語では「ブラック・カリビアン[1)]」と分類される黒人である。「ブラック・カリビアン」などのエスニック・グループは，国勢調査において「エスニック・マイノリティ」と位置づけられている。

「ウエスト・インディアン」については，これまで移民研究やカルチュラル・スタディーズなどで研究が蓄積されてきた。ポール・ギルロイ（Paul Gilroy）［Gilroy 1987］は「ウエスト・インディアン」の若者を統合する装置として，レゲエのサウンド・システムがいかに重要な役割を果したかを論じている。レゲエをうみだしたジャマイカは西インド諸島の北西端にあり，東南端のトリニダード・トバゴとは約 2,000 キロ離れている。本稿で研究対象とするカリプソは，カーニバルを基層文化にもつトリニダード・トバゴでうまれた歌謡である。

世界的にポピュラーな音楽になったレゲエの研究としては，レゲエからジャマイカの文化を読み解いた鈴木慎一郎の研究［鈴木慎一郎 2000］やレゲエからアフリカの若者文化を読み解いた鈴木裕之の研究［鈴木裕之 2000］など数多くの論考がある。鈴木裕之の研究［鈴木裕之 2006］は，アフリカではじめてレゲエのスーパースターになったアルファ・ブロンディのレゲエの歌詞から，アフリカ人の宗教観を読み解いたものである。梶茂樹［梶 2001］は，アフリカの口承文芸社会における歌が小説の機能を果たすとして，歌詞分析の重要性を指摘している。

カリプソは，口承伝承で歴史や文化を伝えた吟遊詩人グリオの伝統をもち，アフリカ起源の音楽の中でも歌詞の重要性は際立っている。しかしレゲエのようにポピュラリティを獲得して

1)「ウエスト・インディアン」は，統計用語「ブラック・カリビアン」より包括的な一般用語である。「ウエスト・インディアン」の中には，西インド諸島出身のアフリカ系だけでなく，インド系や中国系などで，イギリスに定住した者もふくまれるので，その範疇は「ブラック・カリビアン」よりも広い。

いないカリプソの研究は数少ない。カーニバルと関連して発展したカリプソについては，ジョン・カウリー（John Cowley）の研究［Cowley 1996］やエロール・ヒル（Errol Hill）の研究［Hill 1972・1997］などがある。またカリブやラテン・アメリカの音楽として，カリプソが言及されているが，カリプソの歌詞の研究は管見の限りみあたらない。

本稿はイギリスにおけるカリプソに焦点をあて，カリプソの歌詞を分析する。カリプソは，歌い手であるカリプソニアンに，聴衆が呼応するコール・アンド・リスポンス形式で歌われるため，歌詞にみられる感情の機微が「ウエスト・インディアン」の心性を伝えると考えたからである。イギリスにおけるエスニック・マイノリティの状況を概観したのち，トリニダード出身でイギリス在住のカリプソニアン，アレクサンダー・D・グレート（Alexander D Great）のカリプソの歌詞から，イギリス社会における「ウエスト・インディアン」の歴史を検討する。アレクサンダーのカリプソの歌詞に通底する中心的なテーマ，「ウエスト・インディアン」が「移民」として位置づけられ，「イギリス国民」あるいは「市民」として社会から容認されていないことを検討する。

I　イギリスのエスニック・マイノリティ

ウインドラッシュ号が来航した1948年，イギリスでは国籍法が制定され，「連合王国ならびに植民地に生まれた者は1949年1月1日以降，すべて連合王国の国民である」とされた。これにより，まず英語を母国語とし，植民地として文化を共有する西インド諸島からの移民がイギリスに流入した[2)]［青柳 2004: 18-19］。

西インド諸島では，それまで主力産業であった砂糖の輸出の不振から，インフレと失業が深刻化し，多くの住民が海外への移民に活路をもとめた［フライヤー 2007: 216］。行き先はおもにアメリカ合衆国やカナダ，中米諸国であったが，1952年にアメリカ合衆国ではマッカラン法によって，西インド諸島移民の入国が事実上閉ざされることになった。それによって，失業にあえぐ人たちのイギリスへの移民が，1950年代の中頃から本格化した［富岡 1988: 231］。

一方，イギリスでも第二次世界大戦後の復興のために労働力が不足したため，ヨーロッパから白人の移民が求められた。さらに足りない労働力を補うために，西インド諸島の英領植民地の人々がその対象となった。なかでも交通・運輸産業や医療産業において労働力不足は深刻であり，イギリス鉄道局，ロンドン交通局，国民健康保険制度は，バルバドス[3)]とジャマイカで労働者を現地採用したほどであった。最初は西インド諸島各島の政庁の援助のもとに移住が

2) 1948年6月のウインドラッシュ号で492人，10月には180人を乗せたオルビタ号が，1949年7月にはジョージック号が269人をイギリスに運んだが，1951年までは西インド諸島からの移民は少なく，1,000名を超えることはなかった［富岡 1988: 224］。

行われたが，その後は私費で移住することが各島に波及した［富岡 1988: 225-226］。

1950年代から1960年代にかけて，西インド諸島にくわえて，インド，パキスタン，バングラデシュなど南アジアからも大量の移民がイギリスへ押しよせた。急激な移民の増加により，1962年に連邦国移民法が制定された。それによると連合王国内で出生した者，連合王国発行の旅券保持者，連合王国海外政府機関発行の旅券保持者以外は入国が制限されることになり，1948年の国籍法で国民とされた者も入国に制限が加えられるようになった［青柳 2004: 18-19］。

西インド諸島からの移民が本格化した1955年から1963年にかけての移民数は，表1に示すとおりである。1962年の移民法制定前のかけこみ入国をピークに，移民としてイギリスに入国する数は減少していった。

表1　西インド諸島からの年度別移民数（人）

1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962	1963
27,550	29,800	23,000	15,000	16,400	49,650	66,300	35,041	7,928

出典：佐久間［1998: 382, 388］

イギリスでは1801年に第1回の国勢調査が行われて以来，第二次世界大戦中の1941年を除いて10年ごとに実施されてきた。1971年の国勢調査によると，西インド諸島生まれの移民数は約30万人であった。西インド諸島生まれの両親のもとにイギリスで生まれた人たちが約16,300人，片親が西インド諸島生まれで，イギリスで生まれた子が約60,000人，西インド諸島出身らしいが，出生地不明の両親の間にイギリスで生まれた子が約22,000人であった。統計の移民数は，実在の移民数の55%に過ぎず，「ウエスト・インディアン」の数は約54万3,000人になり，ウインドラッシュ号から15年たたないうちに，イギリスの全人口約5,390万人の約1%を占めていた［富岡 1988: 238-239］。

現代ではどのような状況であるのか，最新の国勢調査である2001年の統計（表2）から検討してみたい。2001年の国勢調査では，エスニック・グループ別に人口が算出されている。西インド諸島からイギリスへ来たのは，「ウエスト・インディアン」のなかでも，そのほとんどがアフリカ系である。したがって，「ウエスト・インディアン」の大半はアフリカ系の黒人で，統計用語では「ブラック・カリビアン」として分類される。イギリスの黒人は，こうした

3) 西インド諸島からイギリスへの移民の多い順は，ジャマイカ，バルバドス，ガイアナ，トリニダードとなっている。バルバドスはイギリスの一貫した植民地下にあり，他の民族と混じりあうことが少なかった。「リトル・イングランド」と言われるほど，イギリスの生活水準に近く，英語も一番きれいであり，独特のエリート意識をもっていた［佐久間 1998: 210-211］。

「ブラック・カリビアン」とアフリカ大陸出身の「ブラック・アフリカン」の二つに大別される。国勢調査においては，黒人だけでなく，アジア系など非白人すべてをふくめて，エスニック・マイノリティと位置づけられる。2001 年の統計では，イギリスにおけるエスニック・マイノリティの人口は 463 万 5,296 人で，総人口 5,878 万 9,194 人の 7.9% を占めている。

表 2　2001 年の国勢調査にみるエスニック・マイノリティの人口と割合

エスニック・グループ	人口数	総人口比(%)
白人（White）	54,153,898	92.1
混血（Mixed）	677,117	1.2
インド系（Indian）	1,053,411	1.8
パキスタン系（Pakistani）	747,285	1.3
バングラデシュ系（Bangradeshi）	283,063	0.5
その他のアジア系（Other Asian）	247,664	0.4
「ブラック・カリビアン」（Black Caribbean）	565,876	1.0
「ブラック・アフリカン」（Black African）	485,277	0.8
その他の黒人（Black Other）	97,585	0.2
中国系（Chinese）	247,403	0.4
その他（Other）	230,615	0.4
エスニック・マイノリティ合計	4,635,296	7.9
総人口	58,789,194	100

出典：Census, April 2001, Office for National Statistics

2001 年の統計では，「ウエスト・インディアン」の全人口に占める割合は，約 1% で，1970 年代とほとんど変わっていない。エスニック・マイノリティの多くを占めるのが，インド系，パキスタン系やバングラデシュ系などのアジア系である。1990 年代から難民などの理由により，アフリカ大陸出身の「ブラック・アフリカン」も増加している。このように「多民族国家」になったイギリスを象徴するのが，前述のウインドラッシュ号「事件」であった。本稿は，こうした歴史的事実をカリプソの歌詞から読み解くものである。

II　カリプソニアン，アレクサンダー・D・グレート

トリニダードのカリプソは，アメリカのジャズ，ジャマイカのレゲエ，ブラジルのサンバのようにアフリカを起源とする音楽である。トリニダードは，1797年にイギリス領になるが，その前にフランス領ハイチ，グアドループ，マルティニークからフランス人が黒人奴隷を連れて入植し，サトウキビやココアなどの農園経営を行っていた［富田 2005: 52］。カリプソは，こうした黒人奴隷が密かに行なっていたスティック・ファイティング[4]という踊りのときに歌われたカリンダから発展した。カリプソの語源は，歌に聴衆が感動したときに発する「ブラボー」という言葉［Loewenthal 2003: 86］，あるいは嘆かわしい知らせを聞いたときに感情を表現する西アフリカのハウサの言葉［Hill 1997: 61］「カイソ（kaiso）」に由来するとされる。

トリニダードに入植したフランス人は，キリスト教暦にしたがって毎年カーニバルを行なっていた。1834年の奴隷解放後には，元奴隷であるアフリカ系黒人がそれまでフランス人行なっていたカーニバルを模倣し，それにアフリカ的な要素を加えた。こうして始まったトリニダード・カーニバルは，現在では盛大な国家的行事となっている。このカーニバルは，世界各地に広まるカリビアン・カーニバルの原型であり，ロンドンのノッティングヒル・カーニバルは，代表的なカリビアン・カーニバルである。

カリプソは，こうしたカーニバルとともに発展した。トリニダードでは，カーニバル前夜に，その年の最高のカリプソニアンを選ぶ「カリプソ・モナーク」の決定戦が行われる。「カリプソ・モナーク」の称号を得ると国民的英雄になり，多額な賞金と車などの副賞が与えられる。ロンドンのカリプソ・モナーク決定戦は，トリニダードにくらべると，極めて小規模ではあるが，数百人の「ウエスト・インディアン」の熱気で深夜まで盛りあがる。この決定戦に出場できるイギリス在住のカリプソニアンは10人で，トリニダード出身者が多いものの，グレナダやセント・ヴィンセント，バルバドス出身者もいる。イギリスでは，カリプソニアンの地位は低く，カリプソ・モナークの賞金もとるに足りない金額である。したがって，プロのカリプソニアンとして生活できる者はほとんどなく，昼間は修理工，大工，旅行代理店員など様々な職業に従事しながら，歌手生活を続けている。

カリプソは雄弁でウイットにとんだ言葉の言い回しや言葉に二重性をもたせ，演劇性の要素を含んだ芸能色の濃い歌謡である。カリプソニアンは歌詞だけでなく，芸名にもこだわりをもつ。トリニダードの偉大なカリプソニアンであるマイティ・スパロー（Mighty Sparrow）やロード・キッチナー（Lord Kitchener）と類似したマイティ・タイガー（Mighty Tiger）とかロ

4) スティック・ファイティングは棒で戦うように踊るもので，トリニダードではその伴奏音楽がカリンダであった。そのためにカリンダが禁止された時期もある。カリンダは米国南部からカリブ海一帯で19世紀に行なわれていた［マニュエル 1992: 186］。

ード・クローク（Lord Cloak）という名前が，ロンドンのカリプソニアンにも見られる。

本稿でとりあげるアレクサンダー・D・グレートは，本名のアレクサンダー・デービッドから，「アレクサンダー大王」を意味する「アレクサンダー・D・グレート」（以下アレクサンダー）という芸名がつけられた。アレクサンダーは，1951年，3歳のときにトリニダードからイギリスに渡った。父はドイツ人，母はアフリカ系トリニダード人[5]という混血，ムラートである。音楽大学を卒業し，30年以上のキャリアをもつプロのミュージシャンで，1980年代になって自分のルーツにあるトリニダードのカリプソを歌いだしたという異色な経歴をもつ。カリプソにソウルやブルースを加えたソカ・ブルースが彼の作風の特徴で，作詞，作曲，編曲までできる数少ないカリプソニアンである。アレクサンダーの体制に批判的なカリプソは，マスコミにも注目され，7年間毎週BBCラジオ放送でイギリスの社会事象をカリプソで歌っている。カリプソニアンの選抜メンバーで競われるカリプソ・モナーク決定戦に，毎年出場している実力派でもある。カリプソテントなどのコンサート活動に加えて，カリプソのワークショップを各地で開いて，学校やカレッジ等でカリプソの普及につとめている。

カリプソの一番の特徴は，時事的な同時代性である［マニュエル 1992:189］。社会を批判して，それを聴衆に問いかけ，賛同を得ることから，人々が共感する事象が明らかにされる。したがって，イギリス社会を歌うアレクサンダーのカリプソの歌詞は，「ウエスト・インディアン」として生きる彼の感情が吐露されたものである。イギリス社会を風刺したカリプソの歌詞を分析することは，イギリス社会と「ウエスト・インディアン」の関係性を検討する上で意義あるものである。

本稿で歌詞として使用する資料は，ウインドラッシュ号来航50周年を記念して1998年に製作されたCD『ラムショップ・カイソ・クロニクルズ（Rum Shop Kaiso Chronicles）―ウインドラッシュ・コレクション（The Windrush Collection）―』の中から，「ウインドラッシュ号でやってきた（They Came Upon The Windrush）」，「13人が死んだのに何も語られなかった（Thirteen Dead & Nothing Said）」と「ひとつの法律（One Law）」である。カリプソの歌詞は，アレクサンダー・D・グレートから入手したものであり，本稿では，英語で書かれた原文に忠実に筆者の日本語訳を掲載した。「ウエスト・インディアン」がウインドラッシュ号以降，イギリス社会でエスニック・マイノリティとして歩むことがどのようなものであったのかについて，現代のカリプソニアン，アレクサンダー・D・グレートがつくって歌うカリプソの歌詞から考察する。

---

5) アレクサンダーの父と母はトロント大学留学中に知り合い結婚した。父はトリニダードとジャマイカで英語教師として働き，ジャマイカのグラマー・スクールではスチュアート・ホールを教えたこともある。イギリスでは図書館司書になり，大英図書館に28年勤めた。母はトリニダードで小学校教師をしていた。

III　カリプソの歌詞にみる「エンパイア・ウインドラッシュ号」

イギリスにおける戦後移民の歴史の始まりを象徴しているエンパイア・ウインドラッシュ号の到来をカリプソではどのように表現されているのだろうか。カリプソニアンであるアレクサンダー・D・グレートが 1998 年に作曲した「ウインドラッシュ号でやってきた」というカリプソの歌詞から検討してみたい。

1　1948 年 5 月，エンパイア・ウインドラッシュ号は
カリブ海からイギリスに向かって出帆した
仕事を求めて 500 人の人たちが同じ船に乗り
中には昔イギリス空軍（RAF）のために働いた軍人もいた
船賃はたった 28 ポンド 10 ペンス
でも当時にしてはすごく大金なのさ
6 月 22 日，ティルベリーの波止場に到着
クレメント・アトリー率いる政府にとって不愉快なできごとだった

カリプソの一番では，ウインドラッシュ号がティルベリー港に入港した状況が語られている。歌詞には「仕事を求めて 500 人の人たちが同じ船に乗り」とあるが，注目すべき点は，ウインドラッシュ号の乗客の約 3 分の 1 が，元イギリス空軍の兵士であったということである［Sewell 1998: 18］。第二次世界大戦中，イギリスでは戦闘員増強と戦時経済における労働力需要により，約 10,000 人のジャマイカ人がイギリス軍に志願し，約 7,000 人がイギリス空軍に従軍した[6)]［富岡 1988: 222］。

第二次世界大戦後にこうした兵士はジャマイカに帰還したが，再びイギリスに行くことを決意した者もいた。ジャマイカで農業をしていた元空軍のパイロットは，イギリス人女性と結婚するため，乳牛 3 頭を売って 28 ポンド 10 ペンスを工面した［Sewell 1998: 17-18］。当時の金額としては，全財産に近い金額を払って，ウインドラッシュ号に乗りこんだのである。

様々な期待を胸にした人たちを乗せたウインドラッシュ号が到着した 1948 年のイギリスは，クレメント・アトリー（Clement Attlee）の労働党政権の時代であった[7)]。この時代に石炭，電力，ガス，製鉄，運輸など重要な産業が国営化し，「ゆりかごから墓場まで」を看板にした

6) 第二次世界大戦中は，黒人アメリカ兵もイギリスに多く駐留し，その数は 1942 年に約 1 万人，1943 年には約 3 万 8 千人であった。この時代，一度にこれほど多くの黒人を見たことがないと言われたが，黒人アメリカ兵は礼儀正しく，評判がよく，むしろ白人アメリカ兵よりも好意的に受け入れられたという［平田 2004: 185, 196］。

社会福祉国家の建設がめざされた［今井 1992: 23］。イギリス人労働者は労働条件の良い上位の職に移り，その欠員を埋めるために求められたのが，西インド諸島などからの移民であった。ウインドラッシュ号の来航を取材したピーター・フライヤー（Peter Fryer）は，船の到着から3週間後に以下の報告を書いた。

> 76名が鋳物工場に就職し，15名は鉄道，15名は農場での仕事，10名は電気工事に従事している。その他には郵便局員，車体製作，配管工など多岐にわたっている。

多額の料金をはらってウインドラッシュ号に乗船した人々の技能は多様であり，中でもイギリス空軍で訓練を受けた者は，とくに有能であったと言われる［Sewell 1998: 27］。しかし第二次世界大戦後のイギリスの復興事業で求められた仕事の大半は，彼らの技術を生かすことができない非熟練肉体労働であった。

「母国」のために働こうとした人達を乗せたウインドラッシュ号の来航は，「クレメント・アトリー率いる政府にとって不愉快なできごと」，すなわちイギリス政府に歓迎されざるできごとであった。戦後復興のために求められていたのは，雇用期間が終わったら本国に帰る「外国人」であった。仕事が終わったあともイギリスで暮らす「外国」からの労働者を政府は想定していなかった。

〈コーラス〉

1948年にウインドラッシュ号でやってきた
どんな運命が待ち受けていようとも，心に希望の炎を燃やしながら
ほんの一握りの人たちが先遣隊となってやってきた
扉はかたく閉ざされていたけれど
たいていの人たちにとって困難だったのは事実だけど
生き残った人たちは常に道を見つけるさ
彼らは偉大なディアスポラとしてやってきた
我々の存在の一部である権利を主張するために
この国はそんな英雄にとって居心地のよいところ
この英雄たちに勝利の月桂冠を持たせてあげよう

---

7) 第二次世界大戦で，ロンドンをはじめとする都市はドイツ空軍の激しい爆撃によって疲弊し，ビクトリア時代に蓄積した富も使い果たし，戦費のためにアメリカなどに膨大な借金を背負っていた。国民は戦争を勝利に導いた英雄ウィンストン・チャーチル（Winston Churchill）の保守党ではなく，労働党のクレメント・アトリーを選んだ［今井 1992: 23］。

歴史が証明するように，彼らのがんばりが
今日イギリスが多文化国家をつくりあげることになったのだ

カリプソのコーラスは，一番，二番，三番の間に，コーラス・シンガーや時には聴衆とともに歌われる部分であり，全員が一体感をともにする部分である。ウインドラッシュ号の乗客は，自分たちがイギリス植民地の臣民，「イギリス国民」であると確信していた。船上では，「心に希望の炎を燃やしながら」，あこがれの「母国」が暖かく迎え入れてくれることを期待していた。

初期の時代の写真をみると，多くの「ウエスト・インディアン」が山高帽をかぶり，スーツにネクタイという，まさに「イギリス人」のステレオタイプにみられる服装でイギリスの地にやってきた。彼らは，本国のイギリス人と同じように英語を話し，教育制度をはじめとして，宗教や文化を共有した。しかし彼らは皮膚の色が異なることにより，イギリス社会へ入る「扉はかたく閉ざされていた」のである。「カラーバー」とよばれる色の障壁から，黒人というだけで仕事や住居をみつけることができず，様々な場面で人種差別を経験した。

ウインドラッシュ号の乗客や初期の時代に仕事を求めてイギリスに渡った多くの「ウエスト・インディアン」は，イギリスで一定期間働いたあと，西インド諸島の故郷に帰るつもりでいた。しかし西インド諸島の深刻な不況によって仕事がなかったことや故郷に帰ったらそれまでのように自由にイギリスに入国ができなくなるという国籍法の問題から，多くの者がイギリス社会で定住化することを余儀なくされた。その結果「ウエスト・インディアン」は，家族や親族が離散した「ディアスポラ[8)]」となったのである。故郷に帰りたくても帰ることもできず，イギリスで差別と闘いながら逞しく生きてきた人達の努力により，「ウエスト・インディアン」の今日がある。彼らは差別という逆境を乗り越え，人間として生きる権利を一つ一つイギリス社会に認めさせてきた。このような「ウエスト・インディアン」をアレクサンダーは「英雄」と表現している。

ウインドラッシュ号来航50周年は，そんな「英雄」すべてに「勝利の月桂冠」を持たせてあげたい記念すべき年である。故郷に帰れない「英雄」は，イギリスで生きる権利を獲得し，イギリス社会を「居心地のよいところ」にしてきた。イギリスで最初の有色移民であった「ウエスト・インディアン」は，エスニック・マイノリティの間でリーダー的存在である。多文化国家イギリスは，エスニック・マイノリティも自分達の権利を主張できる「居心地のよいところ」であり，そうした素地をリーダーが作り出してきたという誇りが読み取れる。

---

8) アンソニー・ギデンズ（Anthony Giddens）は，「ディアスポラ」という用語は「エスニック・グループが，多くの場合，強制されたかたちで，あるいはトラウマを負った状況で，祖国から外国地域に四散すること」を指称している［ギデンズ 2004: 330］。

2　ウインドラッシュで来た人たちが最初ではない
その前に何千人もの人たちがイギリスにやってきた
民主主義のため自分たちの役割を果たすために
多くの人たちが職務を忠実に果たして死んでいった
イギリスが自由な国であり続けることを確信して
ウインドラッシュの船の上ではイギリス国民だと思っていた
ビロードの手袋にくるまれた鉄拳をくらうまでは
彼らは不要，国民じゃなくて，移民にされてしまった
モーズリーやパウエルが無知な人たちを煽動していた

二番の歌詞を見てみよう。ウインドラッシュ号の乗客は，イギリスで最初の黒人ではない。4 世紀から 5 世紀にかけて，軍事行為や交易事業により，すでに少数のアフリカ人が存在していた。資本主義が海外へと発展すると，西インド諸島の奴隷などが，イギリスで召使として雇用された。18 世紀後半になるとイギリス国内の黒人は，1 万人を超えていた[9]［フライヤー 2007: 163］。

ロンドンなどイギリスに黒人が一挙に増えるのは，第二次世界大戦後である。空軍で活躍した西インド諸島出身者が，イギリスに定住したことがきっかけであったとも言われる［川北 2000: 28］。ウインドラッシュ号の乗客であった元空軍兵は，運良く生き延びることができた人たちであった。その陰に「多くの人たちが職務を忠実に果たして死んでいった」のである。植民地から志願兵は，主力戦闘要員として戦闘の最前線で，宗主国イギリスが「自由な国であり続ける」ために戦った。彼らは本国人より命を落とす危険性がはるかに高かった。こうした同胞のように，イギリスのために戦った元空軍兵が多く乗船するウインドラッシュ号への対応は，冷ややかなものであった。

この船の到着前日の『デイリー・エクスプレス』紙では，「エンパイア・ウインドラッシュ号に乗せられた 500 人の不要の人々（unwanted people）が，カリブ海，メキシコ湾，大西洋を 27 日さまよった後，新たな生活の始まりに期待を寄せている」と報じた。イギリスのために命をかけて働いた人たちを新聞は「不要な人々」と報道した。ウインドラッシュ号は，実際には「初めて」の移民船ではなかったが，その到来を告げるニュースが国会やマスメディアで大々的に取り上げられたことにより，一大事件となった［浜井 2004: 36］。

9) アメリカの独立戦争でイギリス側の軍隊に協力した黒人は，パリ条約締結後，ロンドンに流れこんだ。そのためロンドンでは黒人の乞食が目立つ現象となり，「セント・ジャイルズの黒い鳥」とよばれた。こうした黒人を一掃するために，「黒人救済委員会」がつくられ，1786 年，アフリカのシエラレオネにロンドンの黒人を送り返す計画が立てられた［川北 2000: 23-24］。

この歌詞にみられるように，ウインドラッシュ号の船上では「イギリス国民」だと思っていた。しかし船のタラップを降りてみると，「不要な人々」として記事に書きたてられ，イギリスの「国民」ではなく，「外国」から来た「移民」にされていた。この意識の差が，アレクサンダーが最も強調したかった所である。

カリプソの歌詞にはないが，アレクサンダーがカリプソの師として仰ぐ世界的なカリプソニアン，ロード・キッチナーもウインドラッシュ号の乗客の一人であったことがこのカリプソを作るきっかけであったという。キッチナーがイギリスという国に憧れをもって船上で作ったカリプソ，London is the Place for Me は彼の代表作の一つであり，このタイトルで4巻のCDが制作されている。キッチナーのカリプソは，今イギリスで静かなリバイバルがおきている。偉大なキッチナーも「移民」や「不要な人々」と括られていることにアレクサンダーは強い憤りを感じたのであった。

キッチナーを含めたウインドラッシュ号の乗客は，期待が大きかっただけにイギリスに上陸してからの対応に立ち直れないほどの衝撃を受けた。彼らの赤裸々な気持ちをアレクサンダーは，「ビロードの手袋にくるまれた鉄拳をくらうまで」と表現している。ビロードの手袋をはめたように上品で，美しい憧れの母国イギリスは，冷酷にも彼らを拒否したのである。この大きな一撃をくらう経験は，彼らがイギリスに来るまではわからなかった現実であった。

「黒人」だからということで「ウエスト・インディアン」に差別のまなざしが向けられた原因は，マスメディアであり，人種差別を扇動した過激な人物，それに追従した人々である。人種差別組織の中で，最も活発に活動したのが，1948年にモーズリー（Mosley）によって結成された連盟運動（the Union Movement）である。モーズリーは「有色移民を彼らの祖国に追い返すべきである」と主張し，政治世界へ進出を切望した。こうした右翼の活動の根本には「イギリスを白く保て」というスローガンがあった［富岡 1988: 474］。

政治の世界から人種差別を助長したのが，保守党議員パウエル（Powell）であった。1968年4月，彼は有名な「血の川演説（Rivers of Blood Speech）[10)]」を行ない，この演説をマスコミがこぞって報道した［佐久間 1998: 389］。多人種社会イギリスの不吉な「流血」の未来を予言したこの演説は，公的な政治の場やマスメディアの報道では「人種主義的」であると批判さ

10）この演説は，西インド諸島をかわきりにアジア，アフリカから相次いで移民がイギリス国内に流入し，ケニアなど東アフリカに住んでいた数十万人のアジア系移民労働者の4分の1が，イギリスに向かうと予想されたときに行なわれた。その内容は以下のとおりである。1. 年間5万人もの有色移民の扶養家族の入国を許可しているのは「狂気」であり，このままではイギリス社会100年史上ほかに例をみないほど社会を変貌させてしまう。2. このまま非白人が増え続ければ，イギリスがアメリカの二の舞になることは避けられない。3. 違うとすれば，われわれの「決起」によって，イギリスの川という川が血で染まるだけだ［佐久間 1998: 389］。パウエルはウインドラッシュ号が来航した1940年代には移民を奨励する帝国主義者であったが，帝国の衰退により内向きなイングリッシュ・ナショナリズムへの傾倒を強めていったと言われる［浜井 2007: 88］。

れ，パウエルは影の内閣から追放されたが，国民からは熱狂的な支持を集めた［浜井 2007: 72］。

3　50年代はずっと生活が大変だった
自分たちにしっぽがついているのだろうか
何十年も，新聞報道は暴動事件ばかりさ
「サス（不審者抑制法）」，停学処分，刑務所，もううんざりだ
新聞報道はいつもこの話題でにぎわっている
でもリントン，ボブ，ジャジーのソウル2ソウルが
ゴールを目指すために，心をなぐさめてくれる
今ではメディアに黒人の国会議員たちが堂々と映っている
次なる世代は少しずつ（by degrees）育っている

カリプソの三番は，「50年代はずっと生活が大変だった」という歌詞から始まる。1951年に3歳でイギリスに渡ったアレクサンダーにも，狭く，みすぼらしい家に家族とトリニダードから次々にやってくる親族がひしめきあって暮らしていた貧困の幼少時代がある。1950年代から60年代にかけて，ロンドンのほとんどの地域では「ノー・ブラック」と書いた紙が戸口に貼られ，「ウエスト・インディアン」が住居をみつけることがきわめて困難であった。ようやく見つけても，劣悪な状態でそこに大勢で住み，住宅事情はきわめて悪かった[11)]。

ウインドラッシュ号来航から10年たった1958年，西インド諸島からの移民の数はイギリス全土で12万5千人を数えていた［フライヤー 2007: 216］。イギリスでは不景気の影響から完全雇用の時代は終わった。労働力の2%にあたる50万人が失業し，ロンドン交通局でもカットが始まった［Sewell 1998: 38］。「ウエスト・インディアン」など有色移民は都市の特定地域に集住し，その地区の白人住民は彼らに侵略されるという危機感をつのらせていた。また多くの黒人男性が白人女性を同伴して街中を往来する光景に白人男性は嫉妬と嫌悪感をいだき，黒人を排斥する空気が，騒擾事件や暴動の引き金になっていった。

こうした状況で事件はおきた。移民の失業率が15%にのぼったイングランド中部の都市ノッティンガムでは，エドワード七世風の華美な服装をした非行少年，テディボーイが黒人を襲う事件が頻発していた。1958年8月には，その反撃で6人の白人が黒人にナイフで刺される

11）劣悪な住宅環境から脱却するために，トリニダードでは「スス」とよばれる「パードナー・システム（Pardner System）」が利用された。アレクサンダーの母もこのシステムに加入して何人かで毎週お金を蓄えていき，何年か後に自分の家族の順番がまわってきたとき，このシステムに加入する人々の蓄えたお金で古くて狭い家から移ることができたという。

という事件がおきた[12)]。

ノッティンガムの報道のあと，暴動はロンドンに飛び火した。人種差別主義者がノッティングヒルに集結し，黒人移民を次々に襲撃した。「イギリスの有色化を許すな！」「黒人はジャングルへ帰れ！」という右翼のスローガンに応えるかのように，「黒人にリンチを！」などと叫びながら，西インド諸島からの移民の家に石やレンガ，火炎瓶までも投げつけたと言われる。彼らの黒人狩りは一週間続き，暴徒は数千人に膨れ上がった［井野瀬 1994: 170-171］。これがイギリス社会を震撼させたノッティングヒル騒擾事件である。翌年の1959年には，ノッティングヒルでアンティグア出身の大工が人種差別主義者に殺され，イギリスで初めての人種対立をめぐる殺人事件となった［富岡 1988: 472］。

1950年代の暴動や騒擾事件はおもに白人住民と黒人移民との衝突であった。1970年以降は差別意識をもつ「ウエスト・インディアン」と彼らに対して偏見をもち高慢な態度でのぞむ警察との衝突になってくる。1976年にはノッティングヒル・カーニバルで，1981年にはロンドン南部のブリクストン（Brixton）で，「ウエスト・インディアン」の若者と警察官のトラブルが大暴動になった。1985年にはバーミンガム，リバプール，ロンドンのブリクストンやトッテナム（Tottenham）で暴動がおきた［富岡 1988: 663］。この年イギリスでは人種暴動の数が2万件に達し，1970年以降人種差別による殺人は60件を越えた［フライヤー 2007: 173］。アレクサンダーの歌詞に「何十年も，新聞報道は暴動事件ばかりさ」とあるように，1950年代から1980年代にかけて「ウエスト・インディアン」に関する新聞報道は，そのほとんどが暴動事件であった。

このように頻発する暴動から，「サス」とよばれる警察官が不審者をよびとめて逮捕できる権限である不審者抑止法が「ウエスト・インディアン」に対して不当に行使された[13)]。「自分たちにしっぽがついているのだろうか」と思われるほど，「ウエスト・インディアン」であるというだけで，疑いのまなざしが向けられてきた。

西インド諸島出身の第一世代がイギリス社会で差別されてきたことにより，イギリスで生まれた第二世代は，学校や社会に適応することが困難であり，ドロップアウトする傾向にあった。こうした若者が多いインナー・シティの学校では，学校の文化を「やつらの文化」，「抵抗の文化」とみなす動きがみられた［佐久間 1998: 217］。とりわけジャマイカのスラム街から生まれた宗教，ラスタファリ思想が若者の間に浸透していた1970年代頃までは，多くの「ウエスト・

12）黒人の反撃は白人の憎悪を燃え立たせ，数十人が負傷する乱闘になり，さらに白人1,500人が加わった。翌週にはその数は4,000人になり，その一部によって黒人住居への投石や黒人を襲撃する「黒人狩り」が行われた［フライヤー 2007: 217］。

13）1980年にロンドンの人口に対する「ウエスト・インディアン」の割合は約6%であったが，不審者抑制法で逮捕された「ウエスト・インディアン」の割合は44%であり，ブリクストンを中心とするランベス区では77%にも上った［Sewell 1998: 93］。

インディアン」が学校に価値を見出せず，停学や退学処分を受けた。ラスタファリの宗教実践である麻薬，ガンジャの吸引や強奪行為等の犯罪行為により，刑務所に収監される若者も少なくなかった[14)]。

そのように社会で逸脱行為を繰り返す「ウエスト・インディアン」にとって，音楽が彼らの心を慰め，癒してくれるものであった。ダブ・ポエトリーのパイオニア，リントン・クウェシ・ジョンソン（Linton Kwesi Johnson）[15)]，レゲエの旗手，ボブ・マーリー（Bob Marley），80年代中頃のロンドンを圧巻したジャジー・B（Jazzy B）のソウル2ソウル（Soul 2 Soul）[16)]。「ウエスト・インディアン」の若者は，こうした音楽を彼らの共通の基盤として繋がりあった。

このような時代を経て，「ウエスト・インディアン」は，イギリス社会に根をはり，テレビには活躍する同胞も映し出されている。例えば，ロンドンのハックニー（Hackney）区から黒人女性として初めて国会議員に選出されたダイアン・アボット（Diane Abbott）は，イギリスの内務大臣になった。彼女の父は職工，母は看護婦で，1951年にジャマイカから移民した。移民第二世代のアボットは，ケンブリッジ大学の大学院を卒業後，ジャーナリストなどを経て，国会議員になった。彼女のように1980年代のサッチャー政権の時代から，成功した「ウエスト・インディアン」が増えてきた。アレクサンダーは，カリプソの中でこうした成功者が少しずつ（by degrees）増えてきたと歌っている。このby degreeという語には，「大学の学位（degree）」によって「ウエスト・インディアン」もイギリス社会でトップにまで上り詰めることができるという，二重の意味が込められている。

14）1992年の内務省の統計によると，囚人全体にエスニック・マイノリティの占める割合は，男性が16.4%，女性が26.6%である。刑務所に収監されている男性は，白人が87.5%，「ウエスト・インディアン」が9.6%，南アジア系が1.7%，中国その他が1.2%である。女性は白人が86%，「ウエスト・インディアン」が11.8%，南インド系が0.8%，中国その他が1.4%である。男性が刑務所に入る割合は，人口1,000人に対して，白人が19.4人，「ウエスト・インディアン」が144.0人で，「ウエスト・インディアン」の収監率は白人の7倍に上る。女性の割合をみると，白人が人口1,000人に対して0.5人，「ウエスト・インディアン」は，9.9人で，「ウエスト・インディアン」の収監率は白人の20倍である。犯罪の内容を見ると，破壊行為が多い南アジア系にくらべて「ウエスト・インディアン」の犯罪の特徴は，強盗，強奪などが多い［Skellington 1996: 162-168］。

15）リントン・クウェシ・ジョンソンは1952年ジャマイカに生まれ，1963年にロンドンに渡った。ダブ・ポエトリーは1970年代前半から始められたレゲエのサブ・ジャンルであり，自作の詩にレゲエのリズムが組み込まれているもので，音楽なしで読まれても，リズムの存在が感じられるものである［鈴木 2000: 91-92］。ジョンソンは2007年8月23日にロンドンのヤア・アサンテワ芸術コミュニティセンターで行われた「カリプソ・ファイナル」（カリプソ・モナーク決定戦）に来訪し，アレクサンダーと談話した。

16）1980年代末にイギリスでジャジーBを中心に結成されたグループである。代表曲「キープ・オン・ムーヴィング（動きつづけろ）」は，「ウエスト・インディアン」の子供たちによってイギリスで作られ，アメリカでダブにリミックスされた。多様な文化的要素を含み，驚くほどの人気を博した。この曲にこめられた「動きつづけろ」というメッセージは，ディアスポラ文化を活性化させ，安らぐことがないという精神を表現していた［ギルロイ 2006: 37］。

IV 「13 人が死んだのに何も語られなかった」——ニュー・クロス大虐殺

次にアレクサンダー・D・グレートのウインドラッシュ・コレクションの CD に収録されている「13 人が死んだのに何も語られなかった」に注目してみたい。

1　1981 年 1 月のある日曜日の朝
13 人の若者が遊んでいる時に火事で亡くなった
コミュニティは世間が全く知らんぷりしているのに驚き呆れた
その大きな火災のあと，行動をおこすことに決めた

〈コーラス〉
僕たちはここで暮らして行くって世界にむかってさけんだ
もう戻れない，もうたとえどんなことがあっても
僕たちはかなり寛容でいられるけれど，もう限界だ
13 人が死んだのに何も語られなかったとき

2　警察はまだ 11 歳の女の子に事情聴取した
火事でお兄さんをなくしたのに，なんと冷たい取調べ
警察は，お兄さんたちが喧嘩をしていたというように強要した
水晶のように透き通った夜の真実は明かされるのだろうか

3　権力者やマスコミにとってはこんな悲劇なんかどうでもいいさ
火事から 6 週間過ぎるまでお悔やみの手紙は何もなし
でもそれからすぐに同じ出来事がアイルランドでおきると
サッチャー首相や側近はそこへ飛んでいって固く手をにぎった

このカリプソは 1981 年 1 月 18 日の早朝，ロンドンのデトフォード（Deptford）でおきた火災への対応の悪さに怒りをこめて作られたものである。この事件は，ニュー・クロス・ロード（New Cross Road）439 番地の古くて狭い建物に，「ウエスト・インディアン」の若者たちが誕生日パーティをしようと集まっていたところ火災が発生し，13 人のティーンエージャーが犠牲になった。近所に住む黒人達は，白人の人種差別主義者によって時限発火装置が仕掛けられていたことを確証していたが，警察は外部からの侵入は一切ないとして，新聞も警察もとりあわなかった。カリプソの歌詞に見られるように，被害者の妹である，まだ 11 歳の女の子

に事情聴取をし，嘘の供述をさせようとした。「黒人」であるということから，人権を無視した非人道的な捜査であった。

人種問題が絡んだこの悲劇に対する警察の扱いに抗議して，1981年3月2日，「ニュー・クロス大虐殺（New Cross Massacre）実行委員会」の旗を先頭に15,000人から20,000人の黒人が参加して，これまでで最大規模のデモ隊が，ロンドンの通りを行進した。この政治的デモに参加した人たちは，デトフォードの火事に対する報道の虚実，事実の歪曲，誤報やサッチャー政権がこの事件に対してすみやかに対応しなかったことに対しても抗議した。カリプソの三番の歌詞にみられるように，ニュー・クロスの火事から1ヵ月後，アイルランドの首相の選挙区であった火事の犠牲者にはサッチャー首相とエリザベス女王がお悔やみのメッセージをすぐに送った［Sewell 1998: 94］。自分の国の首都ロンドンでおきた火事の犠牲者には一言もなかったのに，である。

このカリプソの歌詞から，「ウエスト・インディアン」が「イギリス国民」でありながら，「黒人」であることからその存在や価値がほとんど無視されている状況が一つの事件を通して浮き彫りにされている。「ウエスト・インディアン」を怒らせたのは，首相や女王が同時期におきたアイルランドの火事に対しては，ヘリコプターで飛んでいったり，お悔やみの言葉を述べたりしたのに，デトフォードの火事に対しては何もしなかったという「差別」あつかいをしたことである。イギリス国内で「白人」の若者が13人死んだら，大ニュースになり，首相や女王が即座に対処したであろうが，「黒人」であることから「無視」されたのであった。しかし，どんなに無視され，差別されても，コーラスの部分にみられるように，「ウエスト・インディアン」にとって，西インド諸島はもはや彼らの帰る場所ではない。悲しいことに，大切にあつかってくれないイギリスが，彼らの国なのである。この事件はその後何の証拠も見つからず，1985年に時効になった[17]。

V 「ひとつの法律」——スティーブン・ローレンス事件

「黒人」だからという理由で，ずさんな警察の捜査により，真相が明らかにされなかったもうひとつの事件が，1993年4月22日におきたスティーブン・ローレンス事件（Stephen Lawrence Murder）である。この事件では，ロンドン南東部のバス停でバスを待っていた18

17）白人と黒人が互いに懐疑的になる中，唯一慰めになったのは，火事の現場となったセント・ポール教区のダイヤモンド神父が火事の犠牲者をセント・ポール教会に安置し，死者のためのミサを行ったことである。神父は遺族を訪問し，生き残った若者の事情聴取に同行し，一周忌には大勢の集まる中，死者や住民の和解のための祈りが捧げられた。ダイヤモンド神父の献身的な働きにより，白人と黒人が反目しあっていたこの地区に和解が見出され，白人と黒人のラポールが築かれ，多文化を融合するハーモニーが生み出されたといわれる［Bomford and Potter 1994: 82-83］。

歳の黒人学生が刺殺された。5人の白人青年が容疑者として浮かび上がり逮捕されたが，証拠不十分であるとして不起訴になった事件である［浜井 2007: 82］。ジャマイカ移民の両親をもち，建築家になりたいと将来を嘱望されていた優秀な青年が，「黒人」であるということから，人種差別に絡んで殺害された。容疑者の親が，この地域の権力者であることに関連して，容疑が不起訴になったと噂されている事件である。この事件を題材にしたアレクサンダーのカリプソ，「ひとつの法律」の歌詞を検討してみたい。

〈コーラス〉

貧しい人々のために法律はあるのだろうか
法律のためのもうひとつの法律があるのではないか
彼らは犯罪とたたかっている間に
ときどき
つじつま合わせのために騙してしまうことがある
真相が明らかになったとき
調査は密室で行われている
だから国会議員が作る法律がひとつ
それから貧しい人にもうひとつ法律がいるんだ

1　スティーブン・ローレンス事件で
法律なんていい加減なことがわかった
未来ある若者がなきものにされた
黒人だからということだけで
警察が悪事を取り調べるのに
時間をかけすぎた
この襲撃事件でだれも罪に問われなかった

2　5年たっても
あまり何も変わっていない
言い訳はいっぱい聞くけれど
どれだけ聞いてもきりがない
抗議をしようと思っても
無視されるに決まっている
でも本当に頭にくるのは，誠意がまったく見られないこと

このカリプソはスティーブン・ローレンス事件から5年後に作曲されたものである。コーラスの部分は，当時のイギリスの法律がいかに貧しい者，弱い者，マイノリティとして生きる者にとって不利なものであり，冷酷なものであるかを示している。アレクサンダーの歌詞全体を通して，「黒人」であるという理由で，理不尽に殺されたことに対する警察の対応に不信感をいだき，失望し，怒りを歌にあらわす様子がうかがえる[18]。

この事件のあと，スティーブンの両親が捜査の見直しを求めるキャンペーンを粘り強く行ない，人種主義的な動機を認識しなかった警察の初動捜査のあり方などに批判の目が向けられた。1997年には労働党政権で，この事件の捜査経過について調査するマクファーソン委員会が組織された。1999年に出された報告書では，事件の捜査を不十分なものとした要因として，捜査員の職業的無能，上官の指導力の欠如と警察組織内部の「制度的人種主義」が指摘された。

スティーブン・ローレンスの事件とマクファーソン報告書は，イギリス社会に大きな波紋を投げかけ，25年ぶりに人種関係法が見直され，一部修正される契機となった。2000年の人種関係法では，警察など公的機関がサービスを提供する際，人種やエスニシティに基づく差別を行うことが改めて禁止され，同時に雇用などで人種間の平等を促進する義務が課されるようになった［浜井 2007: 82］。その背景には，差別に立ち向かい闘ってきた「ウエスト・インディアン」の努力と公然と差別されていた時代に生まれたために犠牲となった命がある。

VI　イギリス社会における「ウエスト・インディアン」

ウインドラッシュ号が来航した1948年，皮膚の色が違う人たちがほとんどいなかった当時のロンドンの街路[19]から，今日の多民族的な状況は誰一人として想像がつかなかったに違いない。第二次世界大戦後のイギリスは，戦後復興のための労働力を必要としていたが，政府が求めていたのは，雇用契約に違反した場合にすぐ本国へ送還できる「外国人」であった。ウインドラッシュ号の乗客も，当初はイギリスには短期間だけ滞在する計画であり，多くの「ウエスト・インディアン」がイギリスに定住化するようになったのは，まさに予想外のことであった［井野瀬 2007: 360］。

イギリスのエスニック・マイノリティの人口は，今では総人口の7.9%を占めるに至ってい

18）1994年に政策研究所が行った調査によると，エスニック・マイノリティの13%が過去1年間に人種差別による嫌がらせを受けたとされるが，こうした被害に対して警察に保護を求めることができるかという問いに対して，アジア系の43%，「ウエスト・インディアン」の72%が否定的な回答をよせ，マイノリティのなかでも「ウエスト・インディアン」が警察に対して根強い不信感を抱いていることを表している［浜井 2007: 82］。

19）それまでにもイギリスには黒人がいたが，貴族の召使，貧民街，軍隊といった特殊な状況であった。一般市民が大勢の黒人をはじめとする有色人種と生活空間を共にするようになったのは，第二次世界大戦以降であり，その契機とされるのがウインドラッシュ号「事件」である。

る。とくにロンドンでは，シティ（City）とよばれる特別行政区と32の区のうち，エスニック・マイノリティの割合が，区の総人口の30%を超える区が13ある。ニューハム（Newham）区では60.6%，ブレント（Brent）区では54.8%が，エスニック・マイノリティである［木村 2006: 69］。この現象は単にロンドンにエスニック・マイノリティが増えて，マルチ・カルチュラルな都市に変遷したことを意味しているのではない。エスニック・マイノリティが集住する地域が形成される一方で，マジョリティである白人は，郊外にマイホームを求めようとする。イギリスの状況は，白人とエスニック・マイノリティが混ざり合う「メルティング・ポット」になっているわけではない。表面的な差別がなくなりつつある現代においても，「ウエスト・インディアン」など，エスニック・マイノリティは，「見えない」差別と今なお闘っているのである[20]。

この背景には，イギリスでは50年以上にわたり，新聞等のマスメディアがエスニック・マイノリティのステレオタイプを形成してきたことがあげられる。「ウエスト・インディアン」は，つねに低学力，高い失業率，犯罪行為，暴動などの問題が結びつけられる傾向にあった。そのためイギリスで生まれた第二世代が共通して抱える問題の根本には，主観的には「イギリス人」でありながら，外観の違いから社会が認めてくれないというアイデンティティの危機的な状況があった［宇田川 1998: 229］。

アレクサンダーのカリプソの歌詞からみてきたように，ウインドラッシュ号の乗客も船上では「イギリス国民」であると思っていたが，タラップを降りると，どんなに才能がある人たちでも「移民」や「不要な人々」とされていた。「黒人」であることと「イギリス国民」であることが理論上はイコールで結びついても，マジョリティの社会がそれを容認できないのである。

ギルロイは，ヨーロッパ人あるいはイギリス人であることと，黒人であるということに対して，ある特別な形の「二重意識」が必要であると論ずる［Gilroy 1993: 1］。こうした意識は，スチュアート・ホール（Stuart Hall）がジャマイカの人間としてイギリスに来て，オックスフォードではじめて一人の「ウエスト・インディアン」になったと回顧することにも共通している[21]。帝国の中心，すなわち支配階級の頂点であるオックスフォード大学で，初めて，周縁化され，排除されている世界が見えてくるのである。

20）1958年に実施されたギャラップ世論調査では，有色人種が自分たちの居住地域に大量に入ってきた場合，移転を考えるかという問いに対して，26%が必ずすると答え，35%がおそらくそうすると答え，移転を考えている人の割合が移転しないと答えた39%を大きく上回った［木畑 1987: 268］。このような意識が現在でも存在する一方で，ドミニカ出身のアレクサンダーの妻のように，黒人である自分に対する視線を恐れて，郊外の白人居住地へ足を踏み入れることができない多くの「ウエスト・インディアン」がいる。

21）スチュアート・ホールは，オックスフォード大学に入学するためにジャマイカを離れるまで，自分を「ブラック」と意識したことはなかった。彼のジャマイカの祖母は，15種類の「ブラウン」の皮膚の色を見分けることができたというが，それを「ブラック」とはいわなかった［井野瀬 2007: 366］。

1951年にイギリスに来たホールは，初期の時代に「ウエスト・インディアン」が生活を築くのに大変な苦労をするのを見てきた。しかしホールも指摘するように，1980年代あたりから正反対の現象がおきはじめた。周縁的な経験が圧力鍋の役割を果たすかのような，周縁そのものが持つ膨大な創造的エネルギーに圧倒されるようになったと言う。生き延びる能力，過酷な状況のなかで生き延びなければならなかった経験が，大きな原動力となって表面にあらわれ始めてきた［ホール 1998: 122-123］。アレクサンダーのカリプソ「ウインドラッシュ号でやってきた」は，過酷な状況で生きてきた「ウエスト・インディアン」の大きな原動力を歌にあらわし，それに貢献した人たちを賞賛するものである。

こうした「ウエスト・インディアン」の原動力を象徴するものが，ロンドンのノッティグヒル・カーニバルである。1958年におきた悪名高いノッティングヒル騒擾事件のあと，白人からの差別や暴力に対して暴力で仕返しをしはじめていた「ウエスト・インディアン」を憂慮して，トリニダード出身のクローディア・ジョーンズ（Claudia Jones）が室内のカーニバルをはじめた。トリニダード人がもつ「カーニバルが人々をつなぐ」という精神は，ノッティングヒル・カーニバルに受け継がれてきた。このカーニバルは「ウエスト・インディアン」をつなぎ，彼らのアイデンティティを形成してきた。1970年代には大暴動がおき，政治問題まで発展したこのカーニバルは，「西インド移民の規律なき暴力」とまで言われた［井野瀬 2007: 364］。しかし現代では，二日間で100万人以上の観客を集めるイギリス最大規模の祝祭になり，多文化に拡大して，発展している。

2002年のエリザベス女王在位50周年の祝賀行事では，ノッティングヒル・カーニバルの仮装パレードがバッキンガム宮殿の前で再現された。色鮮やかな仮装コスチュームに身をつつんだ「ウエスト・インディアン」の踊り手，マスカレーダーが，国家の祭典であるエリザベス女王の祝賀式典のパレードの先頭を飾った。それはエスニック・マイノリティである「ウエスト・インディアン」の存在と彼らの文化的多様性を顕在化させるものであった［浜井 2007: 80-81］。この様相はウインドラッシュ号以来，約50年間にわたるイギリス社会の変化を示し，多民族国家イギリスを象徴する出来事であったと言えよう。

現代では，政治や社会問題の中に「ウエスト・インディアン」がとりざたされることはほとんどない。むしろアレクサンダーのカリプソにあるように，イギリス社会では大学での学位や資格などを取得するにより[22]，マイノリティである「ウエスト・インディアン」も社会の階段を上りつめることができ，イギリスの大臣になった人もいる。「ウエスト・インディアン」は，社会からの逸脱行為をすることではなく，イギリス社会のなかで，自分たちのアイデンテ

22）1988年から1990年にかけて行なわれた最高レベルの学歴・資格保持者の割合をみると，「ウエスト・インディアン」の女性は16%で，白人の平均値の13%を上回る［Skellington 1996: 197］。

ィティを築き上げようとしている。

では「ウエスト・インディアン」のアイデンティティが変化したのはいつのことであろうか。それは，イギリス社会でトップにのぼりつめた「ウエスト・インディアン」があらわれ，スチュアート・ホールが膨大な創造力のエネルギーに圧倒されるようになった1980年代であろう。そのような時代に，本稿でとりあげたアレクサンダー・D・グレートも，ワールド・ミュージックの影響から自らのアイデンティティをトリニダードに求め，トリニダードの歌謡カリプソで歌い始めた。彼はカリプソでイギリスの社会事象を歌い，そこに生きる「ウエスト・インディアン」の気持ちを代弁する。

本稿で取り上げたアレクサンダーの3つのカリプソは，「イギリス国民」とは何を意味するかを問いかけている。アメリカ合衆国では，イギリス系でない人の数が増加し始めたとき「アメリカ人」という語はずっと複雑な意味を持ち，合衆国で人が何人かと尋ねるとき，「アメリカ人」というのは求める答えではなくなった［グレーザー／モイニハン 1986: 42-43］。同様に，多文化国家へと変貌したイギリスでも，「イギリス人」あるいは「イギリス国民」という言葉に包含される意味は，ウインドラッシュ号の時代とは明らかに異なるものである。

ウインドラッシュ来航50周年を記念する1998年には，多くの記念行事が行なわれた。その頃から「イギリス人とは誰か」というアイデンティティの論争が闘わされてきた[23)]。アレクサンダーの3つのカリプソもこの時期につくられたものである。「イギリス人」という言葉の中に，エスニック・マイノリティもすべて含まれる時代になっても，なかなか人々の意識や視線が変わっていないという現状があるからこそ，「ウエスト・インディアン」は，ウインドラッシュ号の時代から「イギリス国民」あるいは「イギリス人」であると主張するカリプソが作られた。

ウインドラッシュ号からの50年間は，イギリス社会が劇的に変化した時代であった。「ウエスト・インディアン」から始まったエスニック・マイノリティの流入は，イギリスの総人口の約8%を占めるに至り，その割合は増え続けている。多民族が混淆する状況を看過して，イギリスという国やその歴史を理解することはもはや不可能になってきたが，これまでイギリスの歴史は，白人の視点から語られてきた。

本稿では，アレクサンダーのカリプソの歌詞をとおして「ウエスト・インディアン」の視点

---

23) そのなかでスチュアート・ホールを中心にして，「イギリス再創造」というプロジェクトが始動した。従来，「イギリス人」を「白人」として想像されてきたが，多民族国家イギリスでは「イギリス人」に「白人性」だけを主張することはもはや不可能である。ホールらが「ブラックであることは，イギリス人ひとつの正常のあり方」であると主張するように，「ブラック・ブリティッシュ」を内包することで「イギリスらしさ」の再構築をこころみた。この「ブラック」の中には，「ウエスト・インディアン」だけでなく，アジア系，アフリカ系など，エスニック・マイノリティと規定されるすべての非白人が包含されるのである［井野瀬 2007: 365-366］。

から1948年から現在までの歴史を検討した。それによって社会的にマイナスのイメージでとらえられていた「ウエスト・インディアン」が，イギリスのためにいかに貢献し，努力してきたかが明らかになった。このようにエスニック・マイノリティの視点からこれまでほとんど知られていない実情を明らかにすることは，現代のイギリス社会を理解するために不可欠なことである。

おわりに

本稿では，イギリスにおけるエスニック・マイノリティの様相を明らかにし，アレクサンダー・D・グレートのカリプソの歌詞から，「ウエスト・インディアン」が「移民」としてあつかわれ，「イギリス国民」として容認されていないというテーマを検討してきた。西インド諸島の学校ではイギリス歴代の王や政治家の名前を覚えて育ち，憧れの母国，あるいは宗主国のために働くことに誇りと希望をもっていたウインドラッシュ号の乗客が，1948年に船のタラップを降りた「事件」から50年以上が経った。

「ウエスト・インディアン」がイギリス社会で歩んだ歴史は，差別との闘いであったと言っても過言ではないであろう。カリプソの歌詞にみられるように，差別はときに大きな事件となった。1981年のニュー・クロスの大虐殺といわれる大火災では13人の若者が，1993年のスティーブン・ローレンス事件では前途有望な青年が犠牲になった。いずれも「黒人」であることが，犠牲になった理由である。ニュー・クロスの事件では警察の対応に抗議して，15,000人から20,000人がデモ行進に参加した。スティーブン・ローレンス事件では，両親が粘り強く捜査の見直しを求め，それがきっかけとなって，人種関係法が改正された。2000年の人種関係法では，公的機関で人種やエスニシティに基づく差別が禁止され，雇用などで人種間の平等を促進する義務が課されるようになった。同じ「イギリス国民」として，人間として当たり前の権利が法律として保証されるのに，ウインドラッシュ号の到来から50年以上の歳月が流れた。

今日，ウインドラッシュ号の時代のようなあからさまな差別は禁じられ，イギリス社会の第一線で活躍する多くのウエスト・インディアンがいる。しかし一方で，イギリス国籍をもち，「イギリス国民」である彼らは，今なお「移民」として語られ，まなざされている。50年以上にわたる歴史のなかで，制度上の改正や表面的な改善は行われてきたものの，根本的な意識の変革に至るまでには，まだかなりの歳月を要するのかもしれない。

謝辞

本稿は名古屋大学大学院の「魅力ある大学院教育」イニシアティブにおける平成19年度「人文学フィールドワーカー」養成プログラム（プログラム名：「ロンドンにおけるアフリカ起源の音楽，カリプソの研究—カリプソニアンのライフヒストリーを中心として」）の成果の一部であり，記して深謝申し上げます。また貴重な資料を提供してくださり，作詞者の意図を伝授してくださったカリプソニアン，アレクサンダー・D・グレート氏（Alexander Kelly Loewenthal）に心から感謝申し上げます。

参　考　文　献

〔英語〕

Bomford, Rodney and Harry Potter

1994 *Father Diamond of Deptford*, West Sussex: Ditchling Press.

Cowley, John

1996 *Carnival, Canboulay and Calypso: Traditions in the Making*, Cambridge: Cambridge University Press.

Gilroy, Paul

1987 *There Ain't No Black in the Union Jack: The Cultural Politics of Race and Nation*, London: Routeledge.

1993 *Black Atlantic: Modernity and Double Consciousness*, London / New York: Verso.

Hill, Errol

1997(1972) *Trinidad Carnival: The Classic Study of Carnival*, London: New Beacon Books.

Loewenthal, Alexander Kelly

2003 Call and Response; Commentary and Scandal- Calypso in Carnival, In *On Route: The Art of Carnival*, edited by Nindi, Pax, pp. 85-98, London: Arts Council England.

Sewell, Tony

1998 *Keep on Moving: The Windrush Legacy - The Black Experience in Britain from 1948 -* , London: Voice Enterprises Limited.

Skellington, Richard

1996 *'Race' in Britain Today*. Second Edition, London: Sage Publications in association with The Open University

Census, April 2001, Office for National Statistics

〔日本語〕
青柳真智子
2004 「イギリス―植民地の大宗主国として」『国勢調査の文化人類学―人種・民族分類の比較研究』青柳真智子（編），15-34 ページ，東京：古今書院.
井野瀬久美惠
1994 「イギリスを去る人，イギリスに来る人―『自由と寛容』の表と裏―」『イギリス文化入門』井野瀬久美惠（編），170-196 ページ，京都：昭和堂.
2007 『大英帝国という経験』，興亡の世界史 第 16 巻，東京：講談社.
今井宏
1992 「歴史」『世界の歴史と文化　イギリス』小池滋（編），16-39 ページ，東京：新潮社.
宇田川史子
1998 「イギリスのエスニック・マイノリティ」『ヨーロッパ新秩序と民族問題　国際共同研究Ⅱ』中央大学社会科学研究所研究叢書(6)，高柳先男（編），219-241 ページ，東京：中央大学出版部.
梶茂樹
2001 「現代都市とポピュラー・ミュージック」『アフリカの都市的世界』 嶋田義仁・松田素二・和崎春日（編），京都：世界思想社.
川北稔
2000 「十八世紀の黒いイギリス人たち」『周縁からのまなざし―もうひとつのイギリス近代』川北稔・指昭博（編），8-29 ページ，東京：山川出版社.
ギデンズ，アンソニー
2004 (1992)『社会学（第 4 版）』（松尾精文・西岡八郎・藤井達也・小幡正敏・叶堂隆三・立松隆介・内田健訳），東京：而立書房.
木畑洋一
1987 『支配の代償―英帝国の崩壊と「帝国意識」』東京：東京大学出版会.
木村葉子
2006 『ノッティングヒル・カーニバルの社会人類学的研究―都市祝祭の集団組織「マスバンド」に焦点をあてて―』名古屋大学大学院文学研究科　修士論文（未刊）.
ギルロイ，ポール
2006 『ブラック・アトランティック―近代性と二重意識―』（上野俊哉・毛利嘉孝・鈴木慎一郎訳），東京：月曜社.
グレーザー，N.／D・P・モイニハン
1986 『人種のるつぼを越えて―多民族社会アメリカ』（阿部齊・飯野正子訳），東京：南雲堂.
佐久間孝正
1998 『変貌する多民族国家イギリス―「多文化」と「多分化」にゆれる教育』東京：明石書店.
鈴木慎一郎
2000 『レゲエ・トレイン―ディアスポラの響き―』東京：青土社.

鈴木裕之

2000 『ストリートの歌—現代アフリカの若者文化』京都：世界思想社.

2006 「『神』を歌うアルファ・ブロンディ—アフリカの都市音楽に表現される宗教観」『平成14年度～16年度科学研究費補助金（基盤研究B(1)研究成果報告書，研究代表者 和崎春日（編），21-51ページ，名古屋：名古屋大学文学研究科.

富岡次郎

1988 『現代イギリスの移民労働者—イギリス資本主義と人種差別—』世界差別問題叢書8，東京：明石書店.

富田晃

2005 『祝祭と暴力—スティールパンとカーニバルの文化政治』東京：二宮書店.

浜井祐三子

2004 『イギリスにおけるマイノリティの表象—『人種』・多文化主義とメディア』東京：三元社.

2007 「多民族・多文化国家イギリス」『現代世界とイギリス帝国　イギリス帝国と20世紀　第5巻』木畑洋一（編），63-93ページ，京都：ミネルヴァ書房.

平田雅博

2004 『内なる帝国・内なる他者—在英黒人の歴史』京都：晃洋書房.

フライヤー，ピーター

2007 『大英帝国の黒人』（日野壽憲訳），東京：本の泉社.

ホール，スチュアート・酒井直樹

1998 「文化研究とアイデンティティ」（本橋哲也訳）『思想』887: 120-140.

マニュエル，ピーター

1992 『非西洋世界のポピュラー音楽』（中村とうよう訳），東京：東京書籍.